熟年俳句誌

5 2013年 月号

かさね

黒羽集（十七）

佐藤喜仙

更紗木瓜フルブロッサムとなりてをり

春昼の見る人のなき草野球

アクロバット飛行の名手恋雀

咲き満ちて囀放ちゐたりけり

十重二十重我を囲める桜かな

潮引きて海苔掻きおうな火をはなれ

子供らの夢ふくれゆく忘れ潮

何となく西を見てゐる春の暮

引鶴の空の昏みに消えにけり

水取の炬火に乾坤目覚めゆく

セーターを腰にまきつけ彼岸過

夕東風やテラスの手にはワイングラス

かさね集

自選句集

「変声期」　松本周二

家雀の影の横切る春障子
蓮の葉の巻き始めたる春の水
枯れ色の野にひともとの花ミモザ
春の日をひらひらさせて群鴎
卒業の祝いの電話変声期
雉ふたつ駆けるごとくに飛立ちぬ

「金縷梅」　古川千鶴

金縷梅や毛糸ほどきしさまなりし
路地庭の関守石や落椿
旅籠屋の大福帳と土雛
窓際の旅の眼鏡や花曇
遠ざかる棹に背を向け残る鴨
白魚のあはれを摘む箸の先

「朧月」

川井素山

猫柳抱ふる乙女の黒き髪
国東の石仏に傷春時雨
夕潮に中州も消えて朧月
浜の宿舟盛り膳の春の色
天領の風趣を残すつるし雛
曲水や十二単の筆の跡

「冬景色」

安藤虎酔

なんとなく林試の森の冬めける
買ひ物の人の流れの早や師走
戦なき平和永遠にと初詣
水温む親子のオールゆるやかに
夜の森閑か鈴虫鳴けばなほ
福来よと三本締めで熊手買ふ

「啓蟄」

田島昭久

東風吹きて通勤のネクタイ思ひ出し
草餅を食ぶる家族は二人のみ
三椏の花咲く道や風柔し
目を据ゑて恋猫道を横切れり
啓蟄や鳩餌を探し歩きまはる
狭庭にも紅梅咲きて空澄めり

撫子集

主宰選

かたづけのもの括り終へ二月尽
開墾を語る黒き碑椿咲く
遠堤につづく春田や風渡る
田の面に漲る力春の雨
雨だれるほどもなく消ゆ春の雪

米田文彦

初午や丹の鳥居を百くぐる
雨近き風を嗅ぎゐる子猫かな
蜆桶汽水湖の砂残りけり
叔母と姪の同じ校歌や卒業す
川はみな海をめざすや水温む

長久保郁子

銀輪の風切る音や土手青む
春の陽に鯉は背鰭を顕にす
恋猫のさつと横切る裏小路
寸ほどの菩薩のおはす春の寺
吟行の脚ねぎらつて春の膳

小池清司

ティーショットの球より高く鳥帰る
望遠のレンズを過り鳥帰る
春泥の駐輪場の轍かな
外来の暖房消して深呼吸
成人式明るい未来の白ショール

岡野安雅

旅人が今日も雪かと尋ねけり　山本達人

雪国はひとつき遅れ虫の出づ

雪山に馬あらはれる陽気かな

残雪の山に無数の星降りぬ

雪の山遠くにありて春景色

啓蟄や畑仕事に日もすがら　青木英林

内裏雛障子の内に静まれり

足元に土の香や水温む

道端にはこべらの群風強し

公園の木の芽奏づるプロローグ

那須野集

主宰選

白梅に朝の勤行本門寺　池内とほる

畑打や取り残されし去年の芋

みちのくの田に引く水に花筏

山の田の隅は手植の千鳥苗

生垣を透きて古屋の梅の花

梅東風や池に逆さの五重の塔　田中清秀

夕闇に梅が香匂ふ古き庵

苔生ふる幹に一輪臥竜梅

露天風呂おぼろ月夜をひとり占め

川づつみ初花啄む小鳥かな

茶塩かけタラの芽香る宵の酔い　丸山酔宵子

蛤の貝を擦つて柱とる

泡盛の古酒（クース）ロックや海の碧

信州の日射し伸びやか山笑ふ

藁刺しの鰯食らふや縄のれん

からからと空き缶寄りし春一番　柳田晧一

ビル角に春一番のほこり舞ふ

湧き上る竜神のごと杉花粉

青空や白雲のごと辛夷咲く

山道に小さき群のすみれかな

石段の土なき継目芽ぶく草
物干に薄物多く春の風
春日あび犬も並びて六地蔵
うつすらと下弦の月に梅真白
遠まわりし桜の蕾咲くを見る

森岡陽子

滾々と井泉溢るる寒の明け
厄払ひ寺門出づれば饅頭屋
ツーリング豆撒き眺め小休止
豆撒きの裃擦れる仮舞台
節分をマイクで仕切る老宮司

和田勝信

水温む浜辺にじやれる子犬かな
川遊びオールも軽く水温む
梅の香に誘はれ歩く小径かな
白梅の香りほのかや路地うらに
シャボン玉夢ふくらませ風に舞ふ

吉田博行

山中の湯に映ゆ白き寒桜
白山のみねざかい無く雪残る
雪吊りの外せぬ日々や加賀の春
水温む二つに分れ鯉の群
風吹きて落花一枚頬につく

後藤克彦

日のさして薄氷浮かぶ手水鉢
春光や白壁に映ゆ木々の影
観梅や三分咲きにて口重し
さんざめく人みな去るや鳥曇
竹やぶの乱舞となりし春一番

橋本修平

土塊に紅紫三つ四つ洲浜草
頬触れる風さはやかに水温む
木の芽吹く日増しに緑輝きて
春塵やトタンが飛んで視野も閉づ
吟行や木の芽萌え出る子規の庵

菊地崇之

大樟の薫ほのかに春の風

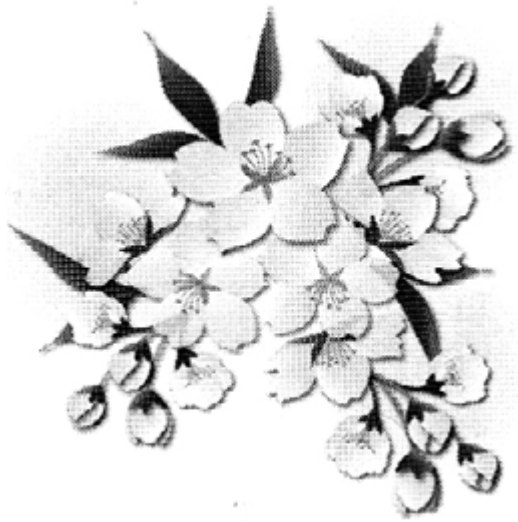
火山灰降るや烏出で来る花菜畑

洞穴は熊襲の住まひ山笑ふ

中腹に伏屋並びて竹の秋

円墳の供花のごときや初桜

小柳千美子



――注意したい季語――

夏の季語①

卯の花腐し（卯の花腐し・卯の花降し）

腐った卯の花のことではない。旧暦四月を卯の花月または卯月ともいうが、この頃降り続く雨のことである。降り続く長雨が卯の花を朽ち果てさせるというのでこの名がある。卯の花はユキノシタ科の空木の花のことで、五枚の白い花弁をもつ小さな卯の花が雪のようにたくさんかたまって咲くさまは、清楚な感じそのものである。その様な花を腐らせるかのように降る雨が、この季語の本意とされる。

例句

書淫の目あげて卯の花腐しかな　富安風生

病み呆けて泣けば卯の花腐しかな　石橋秀野

卯の花腐し山国は墓所多し　飯田龍太

文責　佐藤喜仙

撫子集・那須野集鑑賞二月号より

客員　村上克哉

撫子集

寒風や黒光りせる百度石　　米田文彦

社参りで一定の距離を百回往復し、祈願する百度参りの標識として立てた百度石が真っ黒につやつやに光っている。黒御影石か、積年の祈願で撫でられた名残だろうか。強い季節風の北風は顔も向け上られないくらいで涙や水洟が出て身を切られる思いである。寒風にもめげずお百度参りする信心厚い人の願も叶うように黒光しているのかも知れない。

四半分の冬至南瓜を炊きにけり　　長久保郁子

冬至の日は一年で最も日が短い、古代中国ではこの日から日が長くなることから、陽気が復するとして「一陽来復」と呼んだ。長寿を保ち冬を健康に禍すことが出来ると言われる冬至粥、冬至南瓜、冬至こんにゃくを煮て食べ柚子湯に浸る風習は今も続いている。「四半分」に歳を重ねた仲の良い御夫婦の様子が目に浮かぶ省略の効いた微笑ましい句になった。

新所帯買物篭に薺かな　　小池清司

正月七日に一年の無病息災を願う古くからの行事の七日粥の七種のうち、すずしろ、すずなは入手し易いが、外は揃えるのが難しいので薺だけの粥にすることが多い。新婚のお二人連れ立ってお買物、最近のスーパーではパック入りの七種粥セットが売られているが、手抜きをせずに薺を買った。故郷を偲び囃しながらなずなを打ち薺粥の朝餉にするのだろう。

（以下略）

伝言板

1 第十七回本部句会（原則第二金曜日）

①日時　2013年5月10日（金）
14：00～17：00
②場所　目黒区「下目黒住区センター」
3階会議室
③投句　当季雑詠　5句
④会費　1000円

2 第十八回本部句会

①日時　2013年6月14日（金）
14：00～17：00
その他事項は第十七回に同じ

3 第十七回吟行（原則第四火曜日）

日時　2013年5月28日（火）
場所　旧古川庭園
集合　庭園正面入口前　11時30分
昼食　各自持参
句会場　滝野川会館
（庭園入口より徒歩2分）
出句数　嘱目3句
費用　交通費・昼食代各自負担、
句会場費均等割り
申込　喜仙宛5月20日まで
（FAX又はTEL）

4 第十八回吟行

日時　2013年6月25日（火）
場所　国立自然教育園
集合　庭園正面入口前　11時30分
昼食　各自持参
句会場　未定
出句数　嘱目3句
費用　交通費・昼食代各自負担、
句会場費均等割り
詳細は次号にて

5「かさね」友の会の皆さん

投句をされる時、裏面に「友の会の声」欄がございますので、句評、近況報告、ご意見などご自由にお寄せください。なお友の会の皆さんは特別作品（十句）、随筆、その他論文等をいつでも投稿することができます。お待ちいたしております。

会員募集

何時からでも「かさねの友」になれます。

年会費　12000円（前納）
ただし年次途中入会者は入会申し出の翌月より12月まで月割りで納付

見本誌　400円（切手可）

見本誌請求先
152－0033
東京都目黒区大岡山2－7－5
かさね俳句会　佐藤喜仙

「かさね」俳句の基本

一、俳句は世界最短の「詩」である。
二、有季・定型・文語体を旨とする。

Ⅰ 前提

① 「詩」とは

水原秋櫻子が俳誌「馬酔木」の昭和六年（一九三一年）十月号に載せた「自然の真と芸術上の真」より抜粋

「ただ自然の真だけを追求したところで詩人たる資格はない。心を養い、主観を通して見たものこそ文芸上の真で、これを尊ぶ人が詩人である」

② 有季の原則

原則①
「季語とは累々と先達が磨いてきた季節を表す言語群であり、歳時記により集大成されている」

原則②
「季語が一句の中で使われ、その句の季節を明確に表出する時、その季語を『表季語』と称する」

原則③
「一年を通して存在する現象、あるいは事物が季を定められている語彙の場合、その定められた以外の季節においてはその語彙は季語とは見做さない」

原則④
「季重なりとは同季に属する季語を一句の中で二語以上重ねて使用する場合をいう」

原則⑤
「例えば絵・版画・掛け軸・屏風・襖絵等に描かれた、通常季語と見做される花鳥等は、季感がないので季語とはみなさない。同様比喩に使われている通常は季語である語群もやはり季感が無きがゆえに、季語とはみなさない」

③ 文語体について

俳句は韻文であることを守るため文語を使用し、用言においては歴史的仮名遣いを必ず使用することとする。

Ⅱ 俳句の約束事

一、切れ字（十八字）を使い俳句にメリハリをつける。
現在切れ字とされている文字は、や、かな、けり、もがな、し、ぞ、か、よ、せ、れ、つ、ぬ、へ、す、いかに、じ、け、けん。

二、表現
主観を直接表現せず、具象表現を使うことにより、自分がその一句の中で言いたい主観を暗示の形で言い表す。

三、地名・固有名詞
地名・固有名詞は一句の中にあって季語に次ぐ重要な働きをするが、一句の中で使用する時は少なくとも大方の俳人が知っているであろう地名・固有名詞にとどめる。

四、三段切
形は三段切でも言わんとする内容が繋がって居れば良しとする。
例　完全な三段切　奈良七重七堂伽藍八重桜　芭蕉
　　三段切でも可　初蝶来何色と問ふ黄と答ふ　虚子

五、前書・ルビ
前書は慶弔の句にのみゆるされる。
ルビは誌中では使用しない。

Ⅲ 俳句の作り方……山口誓子

私の俳句の作り方を、図式で現せば、至極簡単である。感動が先立たねばならぬ。事物と出会って思わず「ああ」と叫ぶその叫びから、俳句は生まれるのである。